県 外 派 遣 報 告 書

審判員名（報告者）	新井　佳樹	所　　属	U15
大 会 名	関東 U15 部会所属　審判クリニック		
期　　間	２０２４年　2月２３日　～　２４日（参加日：2月２３日･２４日）		
会　　場	塩浜市民体育館		

ス ケ ジ ュ ー ル		
期　　日	内　　容	場　　所
2月２０日	開校式･講習会	ZOOM 会議　参加者自宅他
2月２３日	関東 U14DC 交流試合（女子）	塩浜市民体育館
2月２４日	関東 U14DC 交流試合（男子）	塩浜市民体育館

講習会　講義内容

講師の藤代透氏、若林謙作氏より関東クリニックにむけての講義をいただいた。概要は以下の通り。

●藤代氏

・2 日間を通して、言われるがままではなく、「自分がどんな審判でありたいか」を大事にする。

・緊張するだろうけれど、遠慮をせずに自分の持ち味を精一杯出す。

・クルーと相談しながら力を発揮する。

・上級へのステップとする。

・各都県の中心として活躍をしながら、仲間と一緒に盛り上げる存在になる。

●若林氏

・「メカ」「IOT」「プレーコーリング」「プレゼンテーション」で特に大事にしたいこと、重視したいことは「プレーコーリング」

・2 日間「寄り添う」ことをテーマにしてほしい。

・選手、ベンチ（コーチ）、クルー（TO）、保護者、観客に「寄り添う」には「プレーコーリング」が大事であり、「判定」が求められる。
観客に対しては「プレゼンテーション」も「寄り添う」ことにつながるが、U15 の試合の多くの場合、会場に観客はほとんどいない。

・同じように判定をするために

①選手、チームの特徴の把握
- ・スピード（RSBQ、トラベリング）
- ・シューター（FUL、キックアウト）
- ・ビッグマン（手の使い方、3sec）
- ・すぐ倒れる（ブロック or チャージ）
- ・プレス（バックパス、8sec、シリンダー）
- ・カッティング（FOM、SCR）
- ・小さいチーム（リバウンド）
- ・アピール（警告、TF）
- ・コーチ（インテグリティ）

②ゲームフローの把握
- ・テンポセット（各 Q の入り）
- ・タイムアウト（何をしてくるか）
- ・交代（目的は何か）
- ・チームファール（ファウルテイクするか）
- ・点差（プレーの強度が上がる）
- ・EOQ（ラストショットは誰か）
- ・EOG（ファウルゲームするか）
- ・ナチュラルインターバル
- ・インテンシティ（無理にコールしない）

・相手の気持ちに「寄り添う」ことができる人
物事を俯瞰して、客観的に捉える、気配り、相手の変化に気づく　ことができるかどうか　これについてトライしていく。

●藤代氏、若林氏両名から
「仲間を大切にしましょう」

担当試合①	
期　　日	２月２３日（金）　U14DC 女子
対戦カード	①東京 vs 群馬　②山梨 vs 栃木　③千葉 vs 埼玉　７分－１分－７分
ク　ル　ー	①CC 新井　U1 山口　拓朗氏（千葉）　U2 竹澤　泰偲氏（栃木） ②CC 山口　拓朗氏（千葉）　U1 竹澤　泰偲氏（栃木）　U2 新井 ③CC 竹澤　泰偲氏（栃木）　U1 新井　U2 山口　拓朗氏（千葉）
ミーティング内容	講師：若林　謙作氏（栃木） 審判主任：栗田　賢吾氏（神奈川） 審判主任：星河　聖氏（群馬） 審判主任：木村　勇氏（茨城）

▶ゲーム後のミーティング

・トレイルとセンターの位置取りが高いから、ロートレイルやローセンターで捉える。

・スイッチサイド中にショットなどが起こったときに、ミッドラインを越えていなければ、バックペダルで戻ることを意識する。

・ファウルバランスを把握する。

・Same play Same call.

・ストロングセンターを発揮する。センターサイドのプレーに対して強く判定をする。

・クルーに「寄り添う」。

今回の交流試合は、タイムアウト無しというルールだったため、ゲーム中にクルーでコミュニケーションをとることができない状況であったため、途中で情報を共有して修正することができなかった。プレゲームカンファレンスやチームや選手のスカウティングなどのゲーム前の確認の重要性を改めて痛感した。普段は同地区、同連盟、同県で行うため、共通認識できている部分に助けられているが、それでもプレゲームカンファレンスは大事にしていかなければならないと感じた。

担当試合②	
期　　日	２月２４日（土）　U14DC 男子
対戦カード	①山梨 vs 神奈川　②東京 vs 神奈川　③群馬 vs 茨城
ク　ル　ー	①CC 新井　U1 飯村　駿平氏（神奈川）　U2 小林　拓海氏（茨城） ②CC 飯村　駿平氏（神奈川）　U1 小林　拓海氏（茨城）　U2 新井 ③CC 小林　拓海氏（茨城）　U1 新井　U2 飯村　駿平氏（神奈川）
ミーティング内容	講師：藤代　透氏（東京） 審判主任：星河　聖氏（群馬） 審判主任：草野　伸明氏（東京） 審判主任：林原　潤氏（千葉）

▶ゲーム後のミーティング

・クロックの管理をする。（TO とのコミュニケーションを積極的に図る。通り過ぎる時に「大丈夫だよ」などと声をかけるだけでもよい）

・ゲーム後半の流れの変化を感じて、テンポセットし直さなければならないときもある。

・CC としてセンターからセカンダリーで吹く強さを持つ。

・エッジの分担をする。（トレイルとリードがそれぞれどこを捉えているのかをお互いに知る）

・ウォーニングを入れたときにクルーで共有をする。

・ゲームフローを感じて、インテンシティコントロールも意識する。

・笛を入れるべきポイントで笛を入れることができていた。

２日目は男子ゲームで、コンタクトも多く、リーガルかマージナルかイリーガルかの判定を求められた。クルーで基準をそろえることも難しく、選手やベンチにフラストレーションをためさせてしまうことがあった。ファウルバランスが悪くなってしまう時間帯があり、ゲームフローを感じる力がまだまだ足りていない。

全体の感想
今回の関東クリニックのテーマが「寄り添う」であったため、選手、ベンチ（コーチ）、クルー（TO）、保護者、観客それぞれに対してどう寄り添うことができるのかを考えた２日間でした。これまでの審判活動で、「試合を円滑に進める」ということは意識をしていましたが、「寄り添う」という感覚は、ほとんどありませんでした。 事前のオンラインによる講習から、初日の試合が始まるまでの間も、どうすれば寄り添うことになるのかを考えましたが、よく分からないままで試合を迎えました。１試合目を終えて、反省を頂いて感じたのは、正しい判定をすることはもちろん大切で、「プレーコーリングが大事」と言われましたが、その正しい判定をするために、「メカ」や「IOT」などが根底にあるのだと思いました。 これは初めて会う他県の方とのクルーで、しかもゲーム中に会話でのコミュニケーションを取りづらい、という制約の中だったからこそ、より強く感じることができたのだと思います。誰とでもクルーを組めて、判定をすることができるために、「メカ」「マニュアル」「IOT」があることを確認できたので、今後の審判活動の中でも大切にしなければいけないと思いました。 また「寄り添う」というのは、ゲームフローを捉えて、選手やベンチ（コーチ）をはじめとする、ゲームに関わる人の想いをくみ取ることでもあり、それは、ファウルバランスや Same play Same call、バイオレーションの判定など、試合中の多くの場面でできることなのだと、今回、反省やアドバイスをいただいた中で出すことのできた、自分なりの１つの答えです。 クルーやＴＯに寄り添うというのも、積極的なコミュニケーションが必要で、ローテーションのミスや確認不足によって、試合の進行を遅らせてしまうこと、ＴＯミスなども少しの気遣いや把握によって、回避できるものなので、やりすぎるくらいでちょうどよいと感じました。 今回のクリニックを通して、Ｂ級審判員として、まだまだ成長しなければならないことを痛感しました。自分が成長することで、所属連盟である U15 をはじめ、埼玉県全体に貢献していきたいと思います。 最後に、開催県である千葉県バスケットボール協会の皆様、講師の藤代様、若林様、ご指導いただいた各都県の U15 審判長の皆様、今回のクリニックに派遣してくださった埼玉県バスケットボール協会、日々ご指導いただいているすべての皆様へ、心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。